

大学生世代と親世代の羞恥感情の比較検討

磯部美良・小谷梓・前田健一

A Comparison of Feelings of Embarrassment between University Students' and Their Parents' Generation

Isobe Miyoshi, Kotani Azusa, Maeda Kenichi

本研究の目的は、(1) 大学生世代とその親世代で、羞恥感情の程度が領域によって異なるかどうか、(2) 大学生世代とその親世代は、それぞれ自分の羞恥感情と異世代の羞恥感情との間に、どの程度世代間格差を感じているか、(3) 羞恥感情の異世代イメージは、各世代の実際の羞恥感情とギャップがあるかどうかについて検討することであった。大学生 217 名とその親 115 名を対象に、羞恥の場面として「家族」「恋愛・性・結婚」「生き方」「仕事・勉強」「金銭」「友人関係」「身体・外見」「習慣」「性役割」「礼儀・教養」の 10 領域を質問紙によって呈示し、そのとき感じるであろう自分の羞恥の程度と異世代が感じるであろう羞恥の程度について回答させた。その結果、親が大学生より強い羞恥を感じるのは「金銭」「身体・外見」「生き方」「習慣」「性役割」の 5 領域であったが、大学生が親より強い羞恥を感じるのは「家族」のみであった。また、大学生と親の各世代は、羞恥感情に世代間格差があると感じており、しかもその格差感には過大評価やバイアスが含まれていることが示された。

キーワード：羞恥感情、世代間格差、大学生、親

文化人類学者のベネディクト (1946) が『菊と刀』において日本人を「恥の文化」に属する民族だと規定して以来、羞恥は、もっぱら日本人論の一部として扱われてきた。これまでに多くの社会学者や文化人類学者が、羞恥への文化論的アプローチを展開してきたが、心理学において、「羞恥感情」は研究対象として取り上げられることが極めて少なかった (永房, 2001)。本研究では、この羞恥感情に焦点を当てる。

一般に、羞恥は加齢とともに失われていくとされている。菅原・山本・松井 (1986) においても、他者の目に映る自分を意識しやすい傾向、すなわち公的な自意識は、思春期をピークに、それ以降は大幅に減少していくことを報告している。ところが、最近のテレビや新聞の報道を見ると、電車の中で化粧をする若い女性、下着と見まがうようなファッション、場所を問わず地面に座り込む「ジベタリアン」など、若者の人目を気にしない行動が頻繁に取り上げられている。すなわち、最近では「羞恥心の低下した若者と、それを嘆く中年世代」という見方の方がむしろ顕著であり、本当に年齢が上がるほど羞恥を感じにくくなるのかどうかは疑問である。

しかし、羞恥感情が引き起こされる場面は一様ではないことを考えると（菅原，1998），若者世代と中年世代で、一方が他方よりも羞恥を感じにくいというのはあまりに単純化し過ぎた見方かもしれない。つまり、若者世代と中年世代とで、羞恥感情を抱く場面が異なる可能性が考えられる。例えば、公共の場で下着のような服を身に付けた若い女性を見て“恥ずかしい格好”と思う中年世代が、自宅で下着姿のままうろろろすることを“恥ずかしい”と思わないことがある。逆に、親から「〇〇ちゃん」と呼ばれることを“恥ずかしい”と思う若者世代が、恋人に愛情を示すことを“恥ずかしい”と思わないこともあるだろう。そこで本研究では、具体的な羞恥の場面をいくつか設定し、場面によって若者世代と中年世代で羞恥の程度が異なるのかどうかについて検討する。

ところで、前述したような「羞恥心の低下した若者と、それを嘆く中年世代」という見方には、羞恥感情に関する実際の世代間格差の有無の他に、格差の認知、すなわち世代間格差感が大きな影響を与えていることが考えられる。つまり、中年世代は若者世代の羞恥感情について（あるいは若者世代は中年世代の羞恥感情について）、実際よりも過大評価、あるいは過小評価をしている可能性がある。例えば、「若い女性が電車の中で化粧をする光景」に関して、年代が上がるほど否定的な見方は強くなるであろうが、必ずしも若者全てがそれを見て“恥ずかしくない”あるいはそうすることを“恥ずかしくない”と思うとは限らない。世代間格差に関する研究分野において、世代間格差が当然視される現象に対して、「世代間格差は現実のものか」を改めて問う研究が登場し、その後、世代間格差の有無ではなく、世代間格差感を問題とする研究が行われるようになってきている（堀田，2002）。羞恥感情に関しても、実際の世代間格差の検討に加えて、若者世代と中年世代はそれぞれ自分の羞恥感情と異世代の羞恥感情との間にどの程度世代間格差を感じているか、そしてその羞恥感情の異世代イメージは、各世代の羞恥感情の現実とギャップがあるのかどうかについて検討することは有意義であろう。

本研究の目的を要約すると、以下の3点を検討することである。(1) 若者世代と中年世代の世代間で、場面によって羞恥感情の程度が異なるのかどうか、(2) 若者世代と中年世代はそれぞれ自分の羞恥感情と異世代の羞恥感情との間にどの程度世代間格差を感じているか。(3) 羞恥感情の異世代イメージは、各世代の羞恥感情の現実とギャップがあるのかどうか。

なお、本研究では、永房（2001）をもとに、羞恥感情を「他者の目あるいは自己の理想像を意識したときに、非難の対象となり得るような自己の行為あるいは他者の行為に対して生じる気持ち」と定義する。

方 法

対象と調査方法

広島大学の学生258名（男子96名，女子162名）とその親212名を対象に質問紙調査を行った。大学生に対しては、授業時間の一部を利用して質問紙を集団実施した。親に対しては、郵送法による質問紙調査を実施した（回収率は67.0%）。回答に不備のあったものを除き、最終的には、大学生217名（男子79名：平均年齢20.6才，年齢範囲18～27才，女子138名：平均年齢20.6才，年

年齢範囲 18～23 才) と親 115 名 (男性 59 名: 平均年齢 51.5 才, 年齢範囲 45～68 才, 女性 56 名: 平均年齢 48.8 才, 年齢範囲 43～61 才) を分析対象とした。

測定尺度

羞恥感情を引き起こす領域として、「家族」「恋愛・性・結婚」「生き方」「仕事・勉強」「金銭」「友人関係」「身体・外見」「習慣」「性役割」「礼儀・教養」の 10 領域を取り上げ、羞恥感情にかかわる構成概念として、菅原 (1991) および成田・寺崎・新浜 (1990) から、「ハジ」「テレ」「対人困惑」「対人緊張」「自己不全感」の 5 つの情緒を選択した。そして、10 の領域それぞれにおいて、これら 5 つの情緒の概念を明確に反映すると考えられる項目を 5 つずつ作成し、さらに、広島大学の心理学研究者・学生数名により項目細部の検討を経て、50 項目 (10 領域×5 項目) から成る羞恥感情尺度を構成した。項目内容は、表 1 に示すとおりである。

質問紙は、大学生用と親世代用の 2 種類を用意した。対象者に対して項目ごとに、(1) 評定者自身の羞恥感情の程度と、(2) 評定者からみた異世代の羞恥感情の程度 (以下、異世代イメージ、あるいは親・大学生イメージと記す) を想定するよう教示し、それぞれについて回答を得た。回答は、それぞれの項目について「全く恥ずかしくない (1 点)」「どちらかといえば恥ずかしくない (2 点)」「どちらかといえば恥ずかしい (3 点)」「非常に恥ずかしい (4 点)」の 4 段階評定で求めた。評定者自身と異世代イメージそれぞれについて、領域ごとに項目の合計得点を算出し、領域別の羞恥感情得点とした。

結果

大学生世代と親世代の羞恥感情の比較

表 2 は、領域ごとの羞恥感情得点について、世代別、男女別の平均値と標準偏差 (*SD*) を示したものである。領域ごとに、2 (世代: 大学生, 親) × 2 (性別: 男性, 女性) の 2 要因分散分析を行った。その結果、世代の主効果は、「家族」「金銭」「身体・外見」「生き方」「習慣」「性役割」の 6 領域で有意であった (順に、 $F_{(1,328)} = 20.12, 21.65, 19.56, 45.00, 51.83, 25.61$, 全て $p < .001$)。親 > 大学生の結果は、「金銭」「身体・外見」「生き方」「習慣」「性役割」の 5 領域でみられた。逆に、親 < 大学生の結果は、「家族」でみられた。

性別の主効果は、「家族」「金銭」「身体・外見」「生き方」「習慣」「恋愛・性・結婚」「仕事・勉強」「友人関係」の 8 領域で有意であった (順に、 $F_{(1,328)} = 8.56, 32.89, 24.42, 2.99, 2.99, 21.99, 16.35, 12.81$, 「生き方」「習慣」は $p < .10$, 「家族」は $p < .05$, 他は全て $p < .001$)。女性 > 男性の結果は、「恋愛・性・結婚」「生き方」「仕事・勉強」「金銭」「友人関係」「身体・外見」「習慣」の 7 領域でみられた。逆に、女性 < 男性の結果は、「家族」でみられた。

世代と性別の交互作用は、「性役割」で有意であった ($F_{(1,328)} = 7.76, p < .01$)。単純主効果検定の結果、親では父が母の得点よりも有意に高いのに対し ($F_{(1,328)} = 3.95, p < .05$)、大学生では女子が男子の得点よりも有意に高い傾向がみられた ($F_{(1,328)} = 3.80, p < .10$)。また男性では父が男子学生の得点よりも有意に高いのに対し ($F_{(1,328)} = 30.78, p < .001$)、女性では有意差はみられなかった。

表1 羞恥感情に関する領域と質問項目

1. 家族

- ・家族を友人や知り合いに紹介すること
- ・家族に悩みを打ち明けること
- ・家族が他人に迷惑をかけたのを代わりに詫びること
- ・家庭環境や自分の「育ち」について他人に話すこと
- ・知り合いのいる前で、家での呼び名（〇〇くん、〇〇ちゃん、パパ、ママなど）で呼ばれること

2. 金銭

- ・商品をしつこく値切って、店の人を困らせること
- ・レジでの支払いの時お金が足りないことに気付くこと
- ・お金があることをひけらかすこと
- ・友人と付き合っていて、ふと貧富の差を感じる
- ・その日の所持金では足りず、やむをえず友人に「お金を貸してほしい」と頼むこと

3. 身体・外見

- ・流行に合わない服装をしていること
- ・ピアスや入れ墨（タトゥー）、美容整形など、身体の一部をわざと変形すること
- ・破れたジーンズをはくこと
- ・他の人にくらべて毛深いこと
- ・電車の中で化粧をしている人と目が合うこと

4. 生き方

- ・未婚の母となること
- ・自分のやりがい、生きがいを見出せないこと
- ・定職につかず、フリーターを続けること
- ・結婚前の男女が同棲すること
- ・就職して経済的には自立できるのに、いつまでも親がかりで暮らすこと

5. 習慣

- ・バーゲン会場の人だかりの中、掘り出し物を見つけるために無我夢中になること
- ・街なかで地べたに座り込んでしゃべったり飲食すること
- ・初対面の人と話すこと
- ・電車の中など大勢の人がいるところで、携帯電話で話すこと
- ・時間をきちんと守らないこと

6. 性役割

- ・女性が料理ができないこと
- ・デートの費用を割り勘にすること
- ・女性が大食いと思われること
- ・男性が「仕事のできない人」と思われること
- ・女性が「気配りの足りない人」と思われること

7. 恋愛・性・結婚

- ・友人とセックスについて話題にすること
- ・結婚相手を見つけるために、お見合いをすること
- ・愛情のないセックスをすること
- ・結婚式で大勢の人に祝福されること
- ・付き合っている相手に、自分に対する恋愛感情をあらためてたずねられること

8. 仕事・勉強

- ・公的な場（学校・職場など）で、大勢の前でスピーチをすること
- ・大勢の前で仕事や勉強の成果をほめられること
- ・できると断言しておいて、実際にはできなかったこと
- ・他の人にはできることが、できなかったこと
- ・周りの人は怠けたりふざけたりしているのに、自分一人だけ真面目に仕事や勉強に取り組むこと

9. 友人関係

- ・それまでの自然な会話が、自分の発言によって気まずい雰囲気になること
- ・流行やその場の話題に一人だけついていけないこと
- ・親友が困っているのに十分な援助をしてやれないこと
- ・友人の悪口を言っているのを、本人に聞かれること
- ・よかれと思ってしたことが友人に受け入れられないこと

10. 礼儀・教養

- ・顔見知りや挨拶しようか迷っているうちに、無言のまますれちがってしまうこと
- ・高齢者に席を譲ること
- ・年上や目上の人と一対一で話をする
- ・知ったかぶりの知識がばれること
- ・人前で漢字が読めなかったり、書けなかったりすること

表2 領域ごとの世代別、性別の羞恥感情得点の平均値 (SD)

領域	大学生		親	
	男子 (n = 79)	女子 (n = 138)	父親 (n = 59)	母親 (n = 56)
家族	11.79 (2.95)	10.43 (2.54)	9.93 (2.35)	9.41 (3.21)
金銭	13.43 (2.40)	15.00 (2.14)	14.71 (2.57)	16.19 (1.97)
身体・外見	11.40 (2.46)	12.71 (2.18)	12.57 (2.28)	13.94 (2.38)
生き方	12.74 (2.43)	12.95 (2.14)	14.33 (2.74)	15.08 (2.30)
習慣	13.62 (2.70)	14.37 (2.06)	15.78 (2.04)	15.91 (1.71)
性役割	11.26 (3.24)	12.13 (2.31)	13.74 (3.01)	12.85 (2.26)
恋愛・性・結婚	11.49 (2.74)	12.55 (2.50)	11.20 (2.87)	13.05 (2.55)
仕事・勉強	13.48 (2.12)	14.39 (2.04)	13.25 (2.28)	14.37 (2.25)
友人関係	14.27 (2.31)	15.54 (2.19)	14.52 (2.43)	15.21 (2.50)
礼儀・教養	12.87 (2.27)	13.30 (2.14)	13.06 (1.90)	13.44 (2.00)

評定者と評定対象の羞恥感情の比較

図1~10は、領域ごとの羞恥感情得点について、世代別に、評定者と評定対象の平均値を示したものである。領域ごとに、2（評定者：大学生，親）×2（評定対象：大学生イメージ，親イメージ）の2要因分散分析を行った。

評定対象の主効果は、「家族」「金銭」「身体・外見」「生き方」「習慣」「性役割」「恋愛・性・結婚」の7領域で有意であった（順に、 $F_{(1,330)}=98.92, 43.75, 110.95, 414.55, 304.94, 229.04, 49.15$ 、「友人関係」は $p < .10$ ，他は全て $p < .001$ ）。親（親と親イメージをこみにした平均値）>大学生（大学生イメージと大学生をこみにした平均値）の結果は、「金銭」「身体・外見」「生き方」「習慣」「性役割」「恋愛・性・結婚」の6領域でみられた。逆に、親（親と親イメージをこみにした平均値）<大学生（大学生イメージと大学生をこみにした平均値）の結果は、「家族」のみでみられた。

次に、評定者の主効果は、「家族」「恋愛・性・結婚」「生き方」「身体・外見」「習慣」「性役割」の6領域で有意であった（順に、 $F_{(1,330)}=5.61, 25.35, 47.08, 8.78, 18.07, 21.39$ 、「家族」は $p < .05$ ，「身体・外見」は $p < .01$ ，他は全て $p < .001$ ）。親（親と大学生イメージをこみにした平均値）>大学生（親イメージと大学生をこみにした平均値）の結果は、「家族」のみであった。逆に、親（親と大学生イメージをこみにした平均値）<大学生（親イメージと大学生をこみにした平均値）の結果は、「恋愛・性・結婚」「生き方」「身体・外見」「性役割」「習慣」の5領域で有意であった。

評定者と評定対象の交互作用は、「家族」「金銭」「習慣」「恋愛・性・結婚」「仕事・勉強」「友人関係」の6領域で有意であった（順に、 $F_{(1,330)}=102.82, 14.94, 142.81, 4.87, 81.45, 5.34$ ，「恋愛・性・結婚」「友人関係」は $p < .05$ ，他は全て $p < .001$ ）。まず、評定者が自分自身と異世代イメージの間に格差を想定しているかどうかについて検討する。評定者の単純主効果検定の結果、親が評

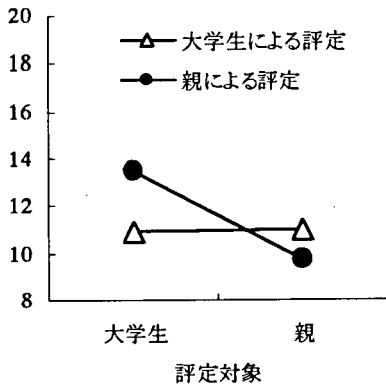


図1 家族

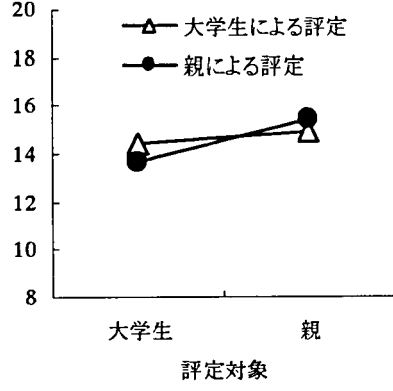


図2 金銭

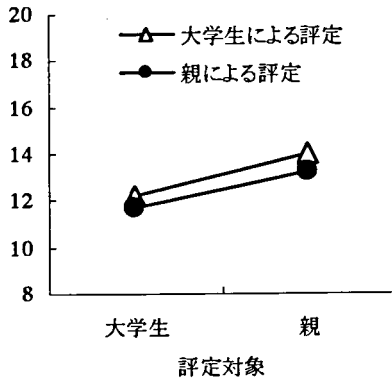


図3 身体・外見

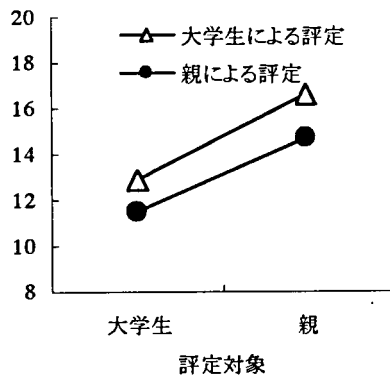


図4 生き方

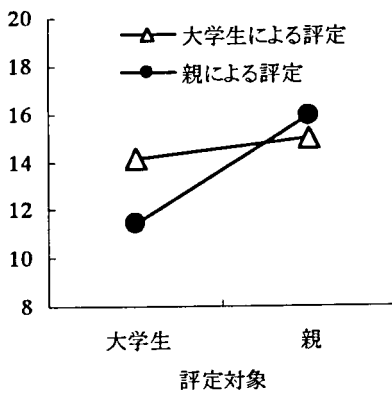


図5 習慣

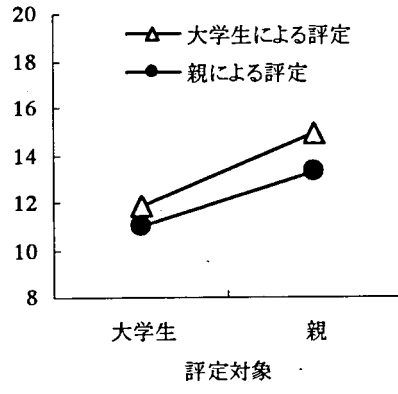


図6 性役割

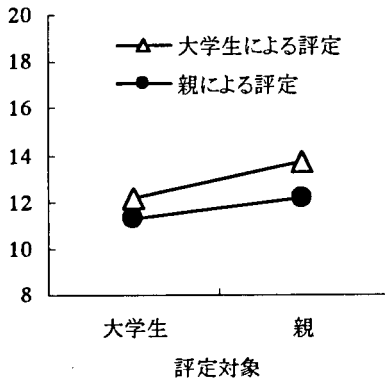


図7 恋愛・性・結婚

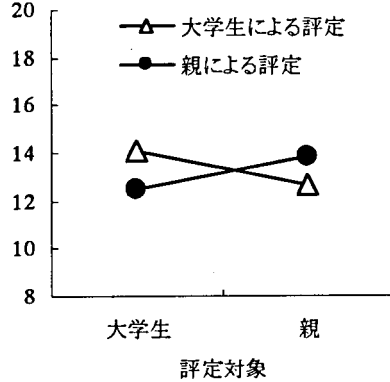


図8 仕事・勉強

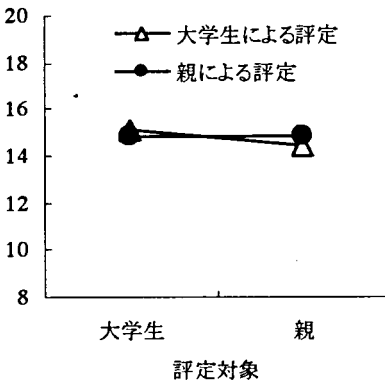


図9 友人関係

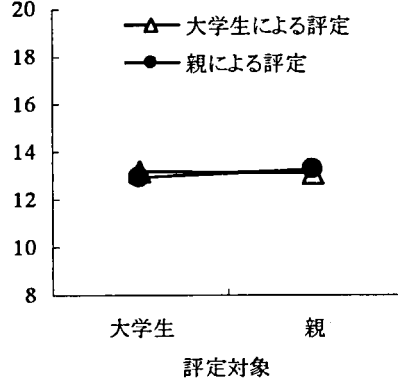


図10 礼儀・教養

定者のとき、親>大学生イメージの結果は、「金銭」「習慣」「恋愛・性・結婚」「仕事・勉強」の4領域でみられた ($F_{(1,330)}=54.91, 432.55, 11.54, 38.13$, 全て $p < .001$)。逆に、親<大学生イメージの結果は、「家族」のみでみられた ($F_{(1,330)}=54.91, p < .001$)。親≒大学生イメージの結果は、「友人関係」でみられた。大学生が評定者のとき、大学生>親イメージの結果は、「仕事・勉強」「友人関係」の2領域でみられた (順に、 $F_{(1,330)}=43.40, 9.11, p < .001, p < .05$)。逆に、大学生<親イメージの結果は、「習慣」「恋愛・性・結婚」の2領域でみられた (順に、 $F_{(1,330)}=432.55, 11.54$, いずれも $p < .001$)。大学生≒親イメージの結果は、「家族」「金銭」でみられた。

次に、各世代について、その世代の当事者の評定と異世代による評定との間に格差があるかどうかについて検討する。対象の単純主効果検定の結果、親が対象のとき、親>親イメージの結果は、「習慣」「仕事・勉強」の2領域でみられた (順に、 $F_{(1,660)}=12.61, 20.08$, いずれも $p < .001$)。逆に、親<親イメージの結果は、「家族」「恋愛・性・結婚」の2領域でみられた (順に、 $F_{(1,660)}=15.48, 42.48$, いずれも $p < .001$)。大学生が対象のとき、大学生>大学生イメージの結果は、「金銭」「習

慣」「恋愛・性・結婚」「仕事・勉強」の4領域でみられた(順に, $F_{(1,660)}=7.07, 109.06, 8.55, 38.10$, 「金銭」「恋愛」は $p < .05$, 「習慣」「仕事・勉強」は $p < .001$)。逆に, 大学生 < 大学生イメージの結果は, 「家族」でみられた ($F_{(1,660)}=60.81, p < .001$)。大学生 ≧ 大学生イメージの結果は, 「友人関係」でみられた。

考 察

領域別に大学生と親の羞恥感情得点を比較した結果, 親が大学生よりも強い羞恥を感じるの「金銭」「身体・外見」「生き方」「習慣」「性役割」の5領域であったが, 大学生が親よりも強い羞恥を感じる領域は「家族」のみであった。ここから, 世代によって強く羞恥を感じる領域には違いがあること, そして, 大学生よりも親の方が羞恥を覚える領域が多岐にわたっていることがわかる。また「性役割」に関しては, 世代と性別の交互作用が見られ, 父は母よりも, 女子学生は男子学生よりも強い羞恥を覚えることが示された。

では, 世代によって強く羞恥を感じる領域に違いがあるという本研究の結果は, どのように説明されるだろうか。世代間の違いには, 生物学的発達による相違(年齢効果)と歴史的变化による相違(時代効果)が存在する(堀田, 2000)。前者は, 若者と中年では年齢が異なっており, それぞれの年齢に応じた役割や価値観, 行動様式を持つために生じる相違である。後者は, たとえば親が若者であった頃の社会情勢や歴史的出来事によって判断される相違である。

本研究結果を見ると, 「身体・外見」「生き方」「習慣」「性役割」における違いは, 時代効果によって説明されるものと思われる。これらの4領域は全て親の方が大学生よりも強い羞恥を感じていたものであるが, 「破れたジーンズをはくこと」「フリーターを続けること」「ジベタリアン」「女性が料理が出来ないこと」など, これら最近の若者に見られる行動や態度は, 伝統的価値観を持つ親たちにとって恥ずべきことに値するのであろう。一方, 「金銭」「家族」における違いは, 年齢効果によって説明されるものと思われる。ある程度の経済力を持つことが期待されている中年世代にとって, お金のなさが露呈することは恥ずかしいことなのであろう。また, “大人っぽく”見られたい大学生にとって, 家族は, 自分が子どもであることを思い起こさせられるアキレス腱のようなものであり, そうした“子どもっぽい”自分を他者に知られること, あるいは自覚することは, 強い羞恥を引き起こすのであろう。

若者世代とその親世代の抱く世代間格差感に関する結果から, 大学生と親の各世代は, 羞恥感情には世代間格差があると感じており, しかもその格差感には, 過大評価やバイアスが多分に含まれていることが明らかになった。特に「生き方」「身体」「性役割」「金銭」「習慣」の5領域の結果をみると, 大学生とその親は, 共に, 「親世代の方が若者世代よりも強く羞恥を覚える」という信念を持つことが示唆された。そして, その世代間格差は, 概ね, 現実と比べて過大視される傾向にあった。

「恋愛・性・結婚」「友人関係」「仕事・勉強」の3領域において, 大学生と親の各世代は, 世代間格差が実際にはないにもかかわらず, 世代間格差があると認知しているという興味深い結果が

得られた。「恋愛・性・結婚」では、両世代が「親世代の方が若者世代よりも強い羞恥を覚える」というバイアスを持っていた。また「友人関係」では、親世代は大学生との世代間格差を感じていなかったのに対し、大学生は自分の方が親よりも強い羞恥を感じるであろうと想定していた。さらに「仕事・勉強」では、両世代がともに、自分の方が羞恥を強く感じるであろうと考えていた。

本研究で得られたもう一つの興味深い結果は「家族」において見られた。親は自分以上に大学生が羞恥を感じるであろうと想定していたが、その格差感を実際の格差に比べて極めて大きいものであった。親は日頃の息子や娘のそっけない行動を、彼らの羞恥心に帰属しているのかもしれない。

以上、大学生世代とその親世代では、羞恥を感じる場面が異なっており、一方が他方よりも羞恥を感じにくいとは一概には言えないことが明らかになった。また、大学生世代とその親世代の抱いている羞恥感情の世代間格差感はある程度現実の格差に基づいているとしても、誇張される傾向にあることが示された。今後は、こうした世代による羞恥感情の相違が何から発生し、何故なのかを検討する必要がある。

引用文献

- Benedict, R. F. 1946 *The chrysanthemum and the sword: Patterns of Japanese culture*. Boston: Houghton Muffin. 長谷川松治 (訳) 1972 菊と刀 社会思想社
- 堀田美保 2000 性役割観に関する若者世代意見と親世代意見の分布認知 心理学研究, 70, 503-509.
- 堀田美保. 2002 若者が抱く世代間格差感・世代イメージと親からの過去についての語りとの関連性 社会心理学研究, 17, 83-96.
- 永房典之 2001 日本の若者における恥意識の特徴 東洋大学大学院紀要, 37, 17-38.
- 成田健一・寺崎正治・新浜邦夫 1990 羞恥感情を引き起こす状況の構造—多変量解析を用いて— 関西学院大学人文論究, 40, 73-92.
- 菅原健介 1991 対人不安の類型に関する研究 社会心理学研究, 71, 19-28.
- 菅原健介 1998 セレクション社会心理学 19 人はなぜ恥ずかしがるのか—羞恥と自己イメージの社会心理学— サイエンス社
- 菅原健介・山本真理子・松井 豊 1986 self-consciousness の人口統計学的特徴 日本心理学会第50回大会発表論文集, 658.